
太一—TAICHI—

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太一―TAICHI―

【Nコード】

N9546D

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

久しぶりに出会った幼馴染の幸樹と太一。再会を喜ぶ幸樹だったが、どこか太一の様子がおかしい。その原因とは。春エロス出品。

一話

頭上の雲は、もうすでに「暗雲」というにふさわしいどんよりとした色をしていて、幸樹は家路を急いだ。

彼は公立高校に通う一年生。日焼けした肌に、広い肩を持つ体はまさしくスポーツ少年である。

今日は春休みでサッカー部の練習帰りだったのだが、夕方にもかかわらず夜のような暗さに、もうすぐ雨が降るのだと感じた。

河原の土手を足早に歩く。

一年間高校に通った結果、ここを進むのが一番近いことがわかっている。

だが、そのルートを通ったとしても間に合わない。

ずっと向こうに見える空は、もっと黒くて、傘を持ってないことを後悔した。

朝食を摂りながら、耳に入ってきたニュースでは、にわか雨の可能性が高いと予報していた。

しかし、朝練に遅刻しかけだった幸樹は、傘を持つ余裕が無かったのだ。

数百メートル先にある橋まで見据えて、朝の失態を思い出し、ため息をつく。

と、俯いた拍子に見えた下の河川敷に、見慣れない制服を見つけた。

背中しか見えないが、あの青色のブレザーは確か、隣県の私立男子高校の制服だ。

電車を二回乗り換えないといけない学校へ、ここから通っている同年代がいるのは珍しい。

自分の行ってる学校もそれなりの偏差値だが、それを無視してわざわざ遠方の進学校まで行っているのか。

きっと勉強熱心なやつなんだろう。

そこまで考えて、はたと気付く。

そうだ、いたじゃないか。そんな勉強熱心な、同じ年の男を。後姿だけとはいえ、すぐに気付かなかったことを我ながら意外に思う。

はやる心を抑えつつ、サッカー部で培ったフットワークで、幸樹は河川敷まで駆け下りた。

人違いだといけないので、後ろから近づいて顔を確かめた。

「ああ、やっぱり！ 太一じゃんか！！」

久しぶりに見た幼馴染の顔に、彼は歓声を上げた。
太一と呼ばれた少年は、振り返って声の主に驚く。

「幸樹！？ うわ、久しぶりだな」

「ちょうど一年ぶりくらい？」

「うん、中学卒業してからは会ってないな。ホント久しぶりだ」

中学までずっと同じ地元の学校だった太一は、突然の再会に頬を緩めた。

高校で進学先が別れてからは、互いに忙しいこともあり、ほとんど連絡は取れなくなっていたのだ。

当時気の合う友人として、笑い合っていたのを幸樹は思い出す。
興奮して、声が大きくなるのを抑えられない。

「学校変わると全然会えないもんなー。でも今日は何で、ここ歩いてんだ？ 駅からお前んちだと反対方向だろ」

「この春休みに、幸樹の学校の近くにある塾に通ってた。それで、今がその塾からの帰り」

「へー、がんばってたんだな」

成り行き上、一緒に話しながら帰ることになる。

太一のほうが若干背が低いいため、幸樹は少しだけ見下ろす形になる。

外で運動している自分に比べ、視線の下にある太一は遙かにさらさらした黒髪で、運動系の部活には入ってないんだなと感じる。

運動系に入っていると、嫌でも外の風や光が頭に降りかかるので、髪の毛は自分みたいにざらつくからだ。

「学校は楽しいか？ この辺からあの学校行っただのってお前だけだろ」

少しおっとりしているが、頭の回る彼なら嫌われることはないだろうと思い、聞いてみる。

しかし、聞いた瞬間戸惑ったように太一の目が揺れた。

「ん、ああ、楽しいよ。部活は入ってないけど、クラスの皆とは仲良いし。それより、お前こそどうなんだよ？ 山っちとかさーちゃんとか元気にしてるか？」

話をそらしたいのか、中学三年生時の同級生の名前を出して聞き返してくる。

「おう、皆元気だぜ。なんとびっくり、またまた同じクラスになったんだけどよ」

「マジかよ。腐れ縁にも程があるって」

「山っちなんか、俺四年連続一緒」

「それってデイスティニー？」

「ちよっと古いって、その台詞」

「あ、やっぱり？」

何となく聞いてはいけないことなのかと察して、幸樹は彼の会話に乗った。

いじめられているような感じでもない。

中学の時、他クラスでいじめがあったが、当時被害にあっていた生徒の顔と今の太一の顔の雰囲気は何となく違う。

しかし、悩みを持っていることは確実だと思う。

幼馴染が一瞬見せた陰りは、今まで見たことの無いものだ。

高校で何かあったのか。

いじめでないなら、一体何が。

表面上は時に腹を抱えて笑いながら、心の中ではどうやってその事を聞き出そうかと考えをめぐらす。

そして、いつの間にか数メートルにまで近づいていた橋の下を見て、あそこに着いたら思い切って聞いてみようかと決意した。

くよくよ考えるより、正面から聞いたほうが早い。

太一とは違い、そこまで自分は気の利いた台詞を言えるタチではないのだ。

それに誠実な態度で聞けば、答えてくれるはず。

だって自分達は幼馴染なのだから。

高校が変わったくらいで、疎遠になろうとも、信頼までが薄らぐことはないと思いたい。

心中、そう願っていると、隣で太一が空を見上げた。

「……やべ、雨降ってきたんじゃないのか、これ」

「え？」

太一の手のひらに落ちた水滴を見て、彼も天を仰ぐ。

すぐに、幸樹の顔にも冷たいものが当たって、しまったと思う。

太一のことに意識がいついていたため、雨が降りそうなことをすっかり忘れていた。

「なあ太一、傘持ってるか」

「いや、忘れてきた。お前は？」

「俺も忘れた」

その瞬間、全身を叩きつける雨が一気に降り出した。

どこか遠くのほうで、雷の閃光もきらめく。

予報通りの夕立だ。

バケツをひっくり返したかのような勢いに、二人は慌てる。

「おい、あそこの橋の下まで走るぞ！」

「ああ」

同意と共に走り出す。

幸樹のほうが足が速かったので、太一の背中を片手で押す。

触れた手のひらから、じんわりと体温が伝わる。

そんな彼の肩が存外薄く細いことに気付いて、何故か幸樹は、内
心むず痒いものがシミのように広がった。

二話

走る二人の周囲でも、通行人達が小さな悲鳴を上げつつ駆け出していた。

だが、橋の下へ向かったのは幸樹達だけのようで。

二人とも何とか目的地まで着いたが、ずぶ濡れになってしまう。水を含んでべったりと体につく制服が、気持ち悪い。

一度脱いで、絞ろうかと思いつ。

幸樹はスポーツバッグを雑草の生える地べたに下ろし、学ランに手をかける。

だがその時、走ったせいで息を上げていた太一が、左目を手で抑えていることに気付いた。

痛みで顔をしかめている様にも見え、幸樹は彼の顔をうかがう。

「どうしたんだ？」

「目の奥がごろごろする」

雨に含まれる大気中のゴミが、目の中に入ったのかもしれない。

立ったままでは何とも出来ないので、太一を座るように促す。

激しい雨は、橋に打ちつけその飛沫を二人に飛ばしている。

少々湿っただけの地べたに座り、幸樹が彼の顔を覗き込んだ。

太一の頬にはまっすぐな黒髪がぺたりと張り付いていて、なぜだか幸樹は目をそらしたくなる。

先ほど走っていて、彼の背中を押していた時も感じた、あのむずがゆさだ。

一体なんだというのだ、この感覚は。

嫌な感じではないが、認めたくも無い気もする。

「ゴミが入ったっぽい」

太一の言葉に、はっとして幸樹は現実に戻された。
今は自分ではなく、目の前の幼馴染のほうが重要だ。

雑念を払うように、敢えてしっかりと彼の顔を、再び見つめた。
左目を抑えている太一の手を、自分の手でゆっくりとどけて、目をちゃんと開くように言う。

太一は痛みで出てきた涙を浮かべつつ、おずおずとまぶたを開ける。

ゴミを逃れるために、無意識に黒目が右往左往しているが、だいぶ白目のところが赤くなっているのが見えた。

「まだ痛いかな？」

「さっき指でちよつと目を触ったら悪化した」

「そこは触ったらだめだろ。そうだな、涙を流せば一緒にゴミも出てくるんじゃないか」

「そんな女々しいこと出来ない」

幸樹の提案を、すぐさま太一は断った。

そんな態度に、幸樹は違和感を覚える。

この状況で涙を流すことが、果たして女々しいだろうか。

それに、流したとしても不可抗力だ。

「おい、太一。そんな意地張っても痛いだけだぞー」

「嫌なものは嫌だ」

語尾を柔らかくして言うが、彼は頑なに拒む。

「あのなあ」

「悪いけど、嫌なんだ。わかってるけど、嫌なんだ」

「何でだよ」

「言いたくない」

「それなら、俺が後ろ向いておくからその間に流せよ。俺は見えないから、女々しいとも思わない」

「でも流すことになるじゃないか。いいよ、ここから出て家まで走る。家で顔を洗えば治る」

「おいおい」

妙な問答になって来た。駄々っ子を諭すような展開に、幸樹は苦笑する。

涙を出せば、ゴミは取れる。ただそれだけのことじゃないか。何故それだけのことが出来ない。

「……ごめん」

幸樹が苦笑いしたのを感じとったのか、太一は痛みに耐えつつ面と向かって謝る。

自分でも、変な意地を張ってるのは自覚しているらしい。

「いや、俺に謝るのはいいんだけどさ」

依然として目を赤くする太一を目前に、彼は困った。

先ほどからずっと太一の左手を掴んだまま、どうしたものかと、幸樹はその目を覗き込む。

太一もこちらを見つめているので、自然と視線が落ち合う。胸の奥でむず痒さがまた来たが、今は無視することにする。

太一がそこまで女々しさに執着する理由はわからない。

しかし、たとえ流したとしても、おかしい感じには映らないはずだ。

きっと彼には、涙が似合う。

今だって、こんなに涙をいっぱいに溜め込んで、瞳がきらきらし

てる。

すごく綺麗だ。

「そんなに、流したくないのか」

もったいない。そんな言葉が心の中で浮き上がる。

ゴミを取る云々を抜きにして、幸樹はそう思う。

いつの間にか思考が違う方向へ行っているかもしれないが、もういい。

ただ、とても目が綺麗だから、泣くのを我慢しているのがもったいないと感じる。

耐えていても、ゴミは取れないので、涙はどんどん溢れそうになるばかりだ。

一方の太一は、そんな幸樹の心中の変化を知らず、

「流したくない」

「どうしても？」

「ああ」

目を真っ赤にして、彼は頷いた。

その瞬間、ついに太一の左目から涙が零れ落ちた。

一滴だけ、すうっと筋を頬に引くように。

ああ、わかった。

幸樹はその一滴があごのラインで落ちていくまでを眺めて、気付いた。

むず痒さの理由にだ。

目の前の幼馴染は、記憶の中の幼馴染とは少し違っている。

いや、変わったというべきか。

中学まで一緒だった太一は、こんなに綺麗じゃなかった。

さっき触った肩の細さは、自分をときりとさせなかったはずだ。

こんなに雰囲気、艶っぽくなかったはずだ。だけど、そんな彼でも太一は太一だ。

一年前共に笑い、ふざけ、遊んだ太一だ。

そして今いる艶やかな彼も太一だ。

そのギャップが、幸樹の胸を掻き毟りたいほど、むずむずさせる。こんな感情は危ない。

早く取り去るべきだ。

早く、早く、こいつから涙を取らなければ。

ああ、また流れそうになっている。

「どうした、こう——」

雷が、彼の名を呼ぼうとする太一の声を掻き消し、同時に幸樹の頭をスパークさせた。

そして雷鳴が轟いた後に。

「ひっ……」

太一がか細く、小さな小さな声を上げた。

それもそのはず。

幸樹は彼の痛がっていた左目を、舌で舐めたからだ。

涙が流れた頬から舌を這わせて、そのまま潤んだ瞳にたどり着いたのだ。

ざらりと目玉を生暖かいものが、覆っていく。

太一の左手は幸樹の右手で既に捕まっていたし、頬も彼のもう片方の手で抑えられていた。

右手が唯一空いていたが、突然の出来事に、太一はじっとしていることしか出来なかった。

おかげで、しつこいくらいに幸樹は太一の目玉を舐めあげる。

どこか必死な感じで、ねっとり、余すことなく。

唾液と吐息が、太一の涙と混ざり合う。

まぶたを舌で押し上げ、空気に触れていなかった所まで侵していくと、小さく粒粒としたものに当たった。

びくりと太一が肩を震わせたのを感じながら、若干強めに舌でその辺を押し舐める。

そうして、幸樹は彼の目から離れた。

呆然としている彼を尻目に、自分の舌に指を這わせて、異物を取る。

「取れた、な」

他にもっと言うべきことがあっただろうが、そんな今更なことしか幸樹は思いつかなかった。

既にむず痒さは、痒さを通り越して痺れへと変わっている。

三話

人差し指についたゴミは、薄っぺらく一ミリほどしかないものだった。

ほこりと言っても良い。だが、そんな小さくても目の中に入れば別だ。

太一に強制的に涙を流させたそれを、幸樹は少しついた唾液と共にズボンでぬぐった。

心は妙に落ち着いている。目玉を舐めるという、普通なら考えもつかないことをやってのけたにも関わらず、なぜかその行為が自然の成り行きのように彼には思えたのだ。

「えっと、……目はどうだ？」

ゴミを取ろうとして舐めたが、その動機が太一のためではなく、自分の心を揺さぶる原因である涙を止めるためだった。

そんな内心を悟らせないよう、あくまで目の保護が目的だと思わせるために、幸樹は問う。

聞かれた太一は、答えない。

やっぱりドン引きされたのかと、幸樹は心配になって手を伸ばそうとした。

すると太一が、だらりと伸ばしていた足を山折りにした。

俯いたままで顔は見えないが、逃げる気なのかと、幸樹は焦って腰を浮かす。

だが、太一を若干見下ろす状態になって、彼が足を曲げた本当の理由を知ってしまった。

勃起している。

少しだけだが、ズボンからでもわかるくらいに太一の性器は勃っていたのだ。

まさか、目玉を舐めた時に感じたというのか。

舐められる側の感覚はわからないので、幸樹は腰を浮かせた中途半端な姿勢のまま、凝視してしまう。

口を開けるが、どう言ったらいいものか戸惑うばかりで。

気付かない振りをしたまま、何事も無かったかのように振舞うべきか、それとも真っ向から謝った上で、走り去るべきか。

頭の中に色々な案が出されては、消えていく。

そうこうしている内に、太一が俯いたままかすれた声で呟いた。

「なんでだよ……」

「え」

「なんでなんだよ!!」

かなりの勢いで顔を上げたかと思うと、突然太一は幸樹の肩を掴んで、思い切り地面に押し倒した。

「お前まで俺を女扱いするのかよ!?! 俺は女じゃない! 男だ!

」

雑草がクッションとなって怪我は免れたが、少しだけ頭がぐらつく幸樹は、彼を見上げることしか出来ない。

太一が目玉を舐められた衝撃で動けなくなったのと、同じ状態だ。幸樹の上に馬乗りになった状態で、太一は叫ぶ。

「色白だし、髪も変につるつるだし、他の男に比べたら細いかもしれないけど、それでも俺は男だ! 太一っていう男だ!!———」

成すがままの幸樹の肩を掴んでた、両手に入る力が弱まる。

「なんで……俺は感じたんだよ……」

幸樹は、彼の言葉と泣きそうな声に目を見開いた。目の前いっぱい広がる太一の顔は、悔しさと悲しさが入り混じった感情を表していた。

「太一……」

「ちくしょう、ちくしょう……」

さっきまで、頑なに拒否していたはずの涙が、太一の目からぽろぽろと零れ落ちる。

それを下から頬で受け止める幸樹は、何故彼が涙を流したくなかったのかがわかったような気がした。

出来るだけ優しく、ゆっくりと彼を両手で押しどける。

案外大人しく、太一は彼の上から身を引いた。

そして再び俯く太一の肩に、彼はぽんと手をかけた。

「お前、もしかして学校で女扱いされているのか？」

鼻をすすっていた太一の体が硬直する。

押し倒した時、お前まで、と彼は言った。

つまり、太一を女扱いする者が他にいるということだ。そんなことをされそうな、彼がいる場所といえば、学校しかない。何より、先ほど学校は楽しいかと聞いた時に、彼は戸惑っていた。

黙りこんだまま答えない彼を急かそうとはせず、幸樹は待っている。

暫くの間、激しい雨音だけが二人の間に流れていたが。ブレザーの袖で目をこすった太一は、幸樹のほうに向き直り頷いた。

「そうだよ。いつの間にか俺は、クラスの中で女役になってたんだ」
「女役？」

「ああ……。男しか居ない空間にいと、皆自然に”女”を探すんだ。男として振舞うために、女を探す。その役回りが俺に来た」

太一の話 요약すると、思春期を男子校で過ごす生徒というのは、共学の生徒に比べ”男”を感じる機会が圧倒的に少ないらしい。

男子生徒が女子生徒に代わって重い物を持ってやったり、高いところに置いた物を取ってやったり。それこそ、恋をしたり。

共学だと、意識しなくてもそこらにある機会が、男子校には無い。すると、生徒は探すのだそうだ。

そういった、自分が男であるために必要な”女”を。

「それがお前に来たということか」

「……多分、さっき言ったように肌が白かったり細かったりで、外見が女々しかったからだと思う」

「どんなことをされるんだ」

「皆、変に俺をちやほやする。俺がゴミ当番の日とか、代わってやるかと言ってくるんだ。去年の体育祭でも、前日準備で一緒にマッスを運ぼうとしたら、いいって言われた。その代わりに、ゼッケン縫ってくれて。当日なんか、勝利の女神とか言われて、応援席の一番真ん中に座らされた」

気にしなかったら、どうということないことかもしれない。

第三者が聞けば、面倒なこと全部クラスのやつらがやってくれるんだしいじゃないかと、思うかもしれない。

だが、クラスで取られるそんな態度は、太一のアイデンティティを揺るがせたのだ。

「自分も、周りと同じようにその雰囲気吞まれて、女役として立

ち回れば楽だったかもしれない。でも俺には出来なかった。どうしても、男でありたかった」

太一がそこまで男としての己に執着することに、幸樹は意外さを覚える。

中学の時、そういったことを意識しているようには見えなかったが、男子校でそんな状況になって逆に意識してしまったのか。

「それを、クラスの奴らには――言いにくいか。やっぱ」

「ああ。それに、俺を女扱いすることさえ除けば、皆良いやつなんだ。悪気があつてそうするんじゃないくて、その場の雰囲気にならされてそうなるみたいだから、俺嫌だつて言えなくて……一年間我慢した。でも、」

段々、太一の目線が地面に下がる。

「終業式の日、クラスが分かれるからってものすごく皆から寂しがられた。それが友人としてじゃなくて、女役に対する寂しさだと思つたら、少しだけ涙が溢れたんだ。そんな俺を見た瞬間の、皆の目が……すげえ嫌だった」

男が演じる女ではなく、本当の女のように見られてた。気持ち悪かつたし、怖かつた。

そう太一は言う。

泣くから女みたいだ、という考えは、昨今の日本では減ってきた意見だ。

しかし狭い檻の中にいる少年達にとって、太一の涙は己の中の何かを刺激したのだろう。

何せ、共学である幸樹の一般的な感覚をも麻痺させたのだから。

「だからお前、泣くのが嫌だったのか」

「うん……ごめん」

太一は謝ると、再び後ろに下がろうとする。

「気持ち悪いだろ？ 俺。お前はゴミを取るために舐めたのかもしれないけど、俺はそれで勃ちちまったんだ。どれだけ嫌がっても、俺はあの雰囲気吞まれて女になってたんだ」

また涙声になって、彼はずるずると後ずさっていく。

勃起したのがよほどショックだったらしい。

その姿が、あまりにも痛々しく、悲しくて、幸樹の胸にあった痺れが再びうずきだした。

立ち上がって、雨がかかる寸前まで下がった太一の腕を彼は捕まえた。

四話（前書き）

この四話目にて終わらせていただきます。（四話目が一番性的描写が濃いです。ご注意）

久しぶりにオリジナルを書いて楽しかったです。

短い連載でしたが、読んでくださった方々、本当にありがとうございました。

四話

去ろうとした太一の腕を掴んだ幸樹は、そのまま引っ張って再び中に入れた。

彼は、戸惑いながらこちらを見る太一と、同じ目線までしゃがむ。そして、しっかりとその目を見て断言した。

「気持ち悪くない」

太一がその言葉に息を飲む。

「別に気を遣わなくても」

「気いなんかつかうかよ。お前は気持ち悪くなんか無い。それに、その辺の男子よりも、それこそ俺よりも、ずっとお前は男だ」

幸樹は目を逸らさず、頭の中で考えながら、ゆっくりと言葉を大事そうにつむいでいく。

「なんでそう思うんだよ」

「男子校の雰囲気になれず、男でありたいってずっと思ってるからさ。あと、今お前感じたからって言ってシヨック受けたみたいだけど……それは多分、俺の勢いに当てられたんだよ。だから勃っちゃまってもおかしくないんだよ」

「え?」

「俺は、お前の目がすごく綺麗で、涙が出そうになるのを見ると、変な気分になるのが怖かったんだ。だから、涙を取るために舐めたんだ。お前のためじゃなく、俺のためにやった」

太一は彼の真意を測りかねる。

だが次に、あのクラスの奴らと同じ気持ちがあるのかと思い不安になった。

さ迷う目の動きでそれを察した幸樹は、すぐに釈明する。

「誤解するなよ。自分でもやっちゃったことは変態っぽいなと思うけど、お前を女として扱ったわけじゃない。男のお前を綺麗だと思った」

「……どういうこと」

ますます太一はわけがわからない。

「だから、そのー…なんていうんだ。俺はお前ほど賢くないから、上手いこと言えないんだけど」

一方の幸樹も、自身ですら整理しづらい頭の中のことを言い表そうとし、唸る。

間違った解釈をされたくはない。

自分の本心をちゃんと理解して欲しい。

腰を浮かせていたままではイマイチだったので、湿り気が増えてきた地べたに座った。

そして必死に考えた結果、出てきた答えは。

「太一」っていう人を、綺麗だと感じたのかな」

名前を呼ばれて、太一が目を見開いた。

「男とか、女とか、そんなん抜きにして太一という奴が綺麗だなんて。それで多分、俺も…興奮した」

「興奮した？ お前が？」

「そうだよ。太一が正直に話してくれたし、俺も言うぞ。俺だって

お前を見て興奮したし、感じた。性的対象ってやつだと思う。あ、でも勘違いしないでくれよ。俺は女役としてのお前じゃなくて、太一としてのお前を見ているんだからな！」

クラスメートとは一緒にするな、と幸樹は語尾を強める。

自分は太一という存在に興奮し、感じて、目の中に舌を入れた。それはもう理性などこれっぽちも無い、本能での行為だ。

頬にへばりついた艶やかな黒髪や、涙で潤ませた瞳、陶器のような白さを持つ肌など、興奮した原因は女みたいな部分ばかりだが、それでも女としては見てない。

他の女ではなく、太一がそういった姿をしていたからこそ。

そんな強い思いで必死に訴える幸樹を、太一は暫く見つめ返す。不安な表情は無い。

だが、どこか震える目で、睨みにも似た視線で、太一は幸樹を見る。

雨が止まないまま、辺りは既に日が暮れて、影が消えていこうとしていた。

その影が、消えるか消えないかの寸前で。

「そう、か。俺だから、太一だから、なんだな」

ついに太一は笑った。

少しだけだったが、頬を緩め息を吐いた。

「ああ」

笑った彼の顔を見て、幸樹も緊張の糸が切れたように、肩の力を抜く。

「男に綺麗だって言われて、今初めて嬉しいと思ったよ」

頭をかきながら、視線をうつかせて太一は言う。
照れたらしい。

「そう言われると、俺も嬉しいかもしれない」

「かも、かよ」

「俺だってまだ気持ちの整理がついてねーんだ」

二人して、笑い合った。

恐らくそれは、友達同士としての笑い。

幸樹はやっと、一年前の頃のように心が通じ合った気がした。
そしてその短い笑いが途切れた頃。

太一が再び真顔になった。

言いにくそうに俯いたが、すぐに顔を上げる。

「あの、さ」

幸樹が何だ、とこちらも神妙な顔つきになる。

「お前まだ俺見て……欲情するのか」

一瞬の間。

心を理解したからこそ、太一は問うた。

聞かれた幸樹は即答する。

「する」

開き直り、と言っては語弊があるかもしれない。

しかし自分の感情を悟った幸樹に取って、その答えは当然だった。
一方的対象で見られた太一も、逃げない。

「もし、今いいよって言ったら触るのか」

この問いに、幸樹は流石にぐっと詰まる。
だが、ここまで来て躊躇いは必要ないと思い直す。

「さわ、る」

目はあわせたが、どこか情けない声に、彼は内心後悔した。
相手も男とはいえ、自身の男としての本能を告白するのは勇気がいるようだ。

対する太一は、少し考える素振りを見せた。
幸樹はこの答えは正直すぎたかと焦る。

しかし、彼が次に出した言葉はそんな不安を大きく覆す効果を持っていた。

「じゃあ、いいよ」

穏やかな顔でまさかの肯定。
かえって幸樹は戸惑った。

「いいのか」

「ああ。お前だったらいい。お前にどういう風に扱われても、それは太一としてだから」

まっすぐに、すがすがしく言う太一の姿は、先ほどの涙を浮かべた時よりも更に綺麗に見える。

思わずつばを飲み込みそうになったが、自制心を働かせ、幸樹は一つ咳払いをする。

何せ、太一は男子校で女として扱われ心に傷を負っていたのだ。

心を理解し合ったとはいえ、急に变なことで、それこそ性的行為をしたら違う意味で傷つくかもしれない。

太一を大事に思うからこそ、幸樹は我慢する。

「無理するなよ。お前も男だけど、俺だって男なんだぞ。どういう意味かわかるよな」

「わかってるから言ってるんだ。……ああ、お前だったら、じゃないな」

少し目上にある幸樹の顔を、太一は上目に見ていった。

「お前が、いい」

その言葉に、幸樹は必死に残していた理性を捨て去った。

彼の肩を強く引き寄せ抱きしめる。

この状態で我慢するほうが、二人にとってマイナスだと思った。どうにでもなってしまう。

幸樹は幼馴染で、男で、誰よりも男でありたいと思う”太一”をかき抱いた。

太一も背中に腕を回し互いにきつく触れ合う。

息遣いが荒くなっていき、白い息が暗闇に溶け込む。

そうして、そのままゆっくりと胸を離し、見詰め合う。

引き込まれるように、二人の唇が重なり合った。

太一の舌を幸樹の舌がねっとり絡ませる。

そのまま歯の裏側をざらりとなぜた。

太一の、鼻から抜けるような息遣いが聞こえてきて、幸樹は更に興奮してくる。

思わず彼のシャツをたくし上げて、わき腹に手を這わせた。

ひくん、と太一の肩が震える。

しかし彼は嫌がるそぶりを見せず、一層密着するように幸樹の背

中に腕を回した。

自分の背に太一の手のぬくもりを感じた幸樹は、先ほどよりも無遠慮に肌を撫で回す。

腹から胸へと手のひらを這わせると、胸の突起に引っかかった。その二つの突起を両手の親指で押してみる。

「――あつ」

唇を離して、太一が小さく鳴いた。

その声が思った以上にか細くて、色っぽくて。

もっと聞きたいと幸樹は思い、今度は人差し指も使ってきつくつまんだ。

すると瞬間、太一の口から息を吐き出すような喘ぎ声が出てきた。背中がぞくぞくするような震えを幸樹は感じる。

もう止まらない。

彼は左手をそのまま突起で弄ばせたまま、太一の太ももに右手をやった。

太ももをせわしなく撫でる。

太一の足の間に彼は座っていたので、太一が快感に耐え切れず足を蹴ってもあたらない。

太ももの次は、足の付け根にさらりと触れた。

その時、太一は焦ったように腰を引こうとしたため、彼がそれを左手で捕まえた。

「そーいやお前、もうヤバかったんだよな」

ついさっき、眼球を舐めたせいで太一の性器は勃起しかけてたのを、幸樹は思い出す。

今改めてみると、それはもう完全にズボンの上からでもわかるくらい熱く膨張していた。

男に興奮させられていることに、やはりまだ少し後ろめたいものを感じているのか、太一はぷいと横に顔を向ける。

そんな反応に、幸樹は可愛く思いつつ苦笑で返す。

「いじけるなよ。俺だってもうこんなんだし」

彼は太一の右手を自分の股間に持ってきて当てさせた。

太一は、手に感じる熱さに驚く。

固く猛る彼の性器は、太一と変わらぬ快感を示している。

「男だからとか、女だからとか、そんなんじゃないかって、お前だから俺は興奮してるし、お前も俺だから興奮するんだ」

快感で濡れた、低い静かな声を出して彼は言う。

「そりゃ俺だって女の子と付き合ったことあるし、その時もキスとかして興奮した。でも、こんなに熱くなったのはお前が初めてだ」

「それって、好きってことなのか？」

「……わからない。お前はどうかんだよ」

「俺も……わからない。でも幸樹が特別だってことはわかる。触られても嫌じゃない。女みたいに触られて興奮しても、幸樹が相手なら嫌じゃない」

「じゃあ、それでいいじゃんか。今は」

「うん」

そのまま二人で、互いの性器に触れた。

我慢できずに、ズボンも下ろして直接こすり合いもしてみる。

直に感じる熱さは本物だ。

先からほとぼしる蜜は性器を濡らし、彼らの手を伝う。

幸樹が太一のそのの先端に爪をかけると、また喘ぎ声が出た。

「やばい、幸樹……っ俺、マジで感じる」
「俺も」

その言葉と共に、彼はぐつと強く握る。

太一も息を詰めらせながら、同じように幸樹の性器を触る手に力を込める。

二人を同時に襲った痺れは頭を真っ白にさせた。

幸樹も太一も、短い声が自然と出たが、太一のほうがやはりか細くて壊れそうな色気を持つ声だった。

タイチ。

快感を吐き出す瞬間、幸樹は彼の名を呟いた。

その名の通り、彼はとても太く真っ直ぐな心を持っていると思う。

だが反面、真っ直ぐすぎて危うさも存在する。

危うさは、一直線上直でちらほら見え隠れしている。

男としてありたい、男として勃起したい、男として幸樹と感じたい。

危険と隣り合わせの欲望が、そこにある。

でも、そんな様子はとても男らしいんじゃないだろうか。

名を呼ばれ幸せそうに微笑む彼を見て、幸樹は思った。

二人を本能で繋がせた雨は、まだなお続いている。
まっすぐに、しとしと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9546d/>

太一—TAICHI—

2010年10月26日05時15分発行